

津田昇平教話 第九話

令和三年一月九日 朝の教話



天地金乃神のご神体は天地である。

おはようございます。令和三年一月九日の朝をお迎えさせて頂きました。

目が覚めるのも神様のおかげを頂いて、目覚まして頂きます。夜の間も、こちらが寝ている時、休んでいる時でも、神様はずっと、私という命の中も外もお守り下さって、中も外もお働き頂いている。神様のお働きに、天地という命が貫ぬかれてある状態ですね。一つひとつの細胞も、全て神様がお働き下さっている。

大体、人間は自分の体重とおんなじぐらい、それに兆を付けたら、その人の大体持っている、構成している細胞と言われたりしていましたけど、五十キロの体重の人は五十兆、六十キロの体重であれば六十兆、ま

あざむくと、それぐらいの細胞で成り立っているとされていますけれども、それだけの多くの、一つひとつの細胞は、お守り下さっている。一つひとつの細胞の中にもまた、多くの物質があるわけですから、そういうものを全部お働き下さっているんですね。

そう考えると、途轍とてつもないことですがけれども、想像もつかないところもありますね。でも、宇宙の果てもそうだし、人間というひとつの命をもってしても、この小天地こてんちの中も、本当に宇宙は広がって、どこまでも限りがないようなところが感じられます。そこも皆、神様が、天地の神様がお働き下さり、統すべ治めて下さっている。だから、私たちは生きることができているんだなあと、そのようなことを思わせて頂きます。

じゃあ、この天地というものってというのは、天と地で成り立っているわけですけども、天と地というのはどういうものかって考えて、まあお話のしようはあるんですけども、あまりこう、難しいことは少し考えずに、漠然ぼくぜんとしてでも結構ですけども、

てんちかねのかみ  
天地金乃神のしんたいご神体は天地である。

一理Ⅱ 福嶋儀兵衛ふくしまぎへえ 一〇より抜粋一

というふうなご理解がありますね。天地金乃神様のご神体は天地である。

よくお参りの方にお話をするんですけど、また、できるだけこれは小さいお子さんによく話をしますかねえ。四歳とか五歳とか、少しお話が聞けるかなっていう方、お子様にはお話をすると思います。三歳くらいからでもお話をしますかねえ。

「神様はどこにいるのかなあ」って、私の方から尋ねるんですよ。じゃあ、みんなニヤニヤして、「うん?」「うん?」っていう感じになりますねえ。「神様はねえ、目に見えるものみんな神様のお体なんだよ」っていうことを、話をします。

で、次に質問をするんです。「先生の体はどれかなあ?」って言ったら。「先生の体」って言ったら、「ん?」「ん?」って思いながら、目の前にいる私が

お結界けっかいに座っていますから、私に指を差す。じゃあ私もこうして、私も自分の体を、まあ言うたら「これが先生の体やな」言うて。

「じゃあ、ぼくの体はどれかな？」って、私がまた質問する。そうすると、「うーん…」と、ちょっと考えて、「これ」って、自分の体の方を向けて、僕の体はこれだよっていうことを教えてくれる。「せやね。先生の体はこれやし、僕の体はこれやなあ」って言うて。

「じゃあ、神様の体は？神様の体はこの、大きい天地そのものなんやねえ。目に見えるもの全部そうやねえ。空も、海も、山も、川も、白い雲も。土も。みーんな神様の体やね。お天道様てんどうさまも、太陽ね、お月様も。宇宙も。みーんな神様のお体なんやね。先生の体はこれ。僕の体はこれ。



神様の体はこの天地全部。だから、『神様に会いたければ、お庭に出てらん。お外に出てごらん』っていうみ教えがあるんよ」ってことをお話するんです。

「お外に出て、お庭に出て、上を向いたら何が見えるかな。あ、空が見えるね。じゃあ、空は神様やね。で、下を向いてごらん。下向いたら何が見える？土があるね。コンクリートでもいい、地面が見える。これも神様やね」って。

教祖様は、

神に会おうと思えば、にわの口を外に出て見よ。空が神、

下が神。

「理Ⅲ 金光教祖御理解 一（二）」

っていうふうにして仰って下さっていますね。

そうやってこう、教祖様のお話もしながら、「神様、てんちかねのかみ天地金乃神様。人

はみんな昔から上を向いて『天』って言って、下を見て『地』って言うんやけどね」って。「天地金乃神様の『天地』ってというのは、この名前はここから来ててね。神様に会いたかったらどこでもいい。外に出たらそうやし、もっと言ったら外に出なくなってもそうやね。目に見えるものぜんぶ」

じゃ、子どもは大体、皆言います。「じゃあ、これも？あれも？」とか  
って言うんですよ。その場でほとんど言いますよ。じゃあ、目の前のお  
結界けっかいのお盆があったら、「これも神様？」とか言って。「そうよ、これも  
神様の体やな」「えっ、これも？」とかってただみ畳を触るんです。「そうや、  
これも神様の体やな」言つて。「ゼーんぶ神様の体や。上向いても、天井  
もそうやし、光もそうやし、空気もそうやし、水もそうやし。ゼーんぶ  
神様の体なやな」言つて。

「僕の体の中にも、お水がいっぱいあるやろうし、血も流れているや  
ろうし。寒くなったら鼻水も出るし、涙も出るやろ」って。「そうや、神  
様の体もそうや。海があつてなあ、山があつて、川があつてなあ。みんな

な神様の体の中なんやな」言うて。

「だからね、目には見えないけれども、神様の中を分けて通ってるよ  
うなもんなんやな。だから、どこに行っても神様に通じるし、神様の中  
で、生活をさせてもらってるんやから、だから、いつでも、どこでも、  
何をしても、『神様〜』って言うたら、ちゃんど神様、聞いて下さっ  
てるぞ」言うて。

『神様』ってお願いしたら、神様いつでも側にいて、僕のこと守って  
くれるしねえ。神様守ってあげたいと思っても、日頃から、『神様〜』  
って、仲良くしてないと、神様助けてあげたくっても、助けてあげられ  
る時もあるけれど、でも、僕の方からもっと『神様、神様』って近付い

てた方がなあ、神様守ってあげやすいんや。遠かったらなあ、悪い人が  
もし来たら、助けてあげたいと思ってても守ってあげられへんやろう」言  
うて。

「だから自分の方から、神様、神様って言うて、仲良う、仲良うして  
たらええんやで。教えの中には、『悪魔が』とかいう言葉もあるんやで」  
言うてね。「悪魔が寄って来たり、まあ悪い人が棒で叩たたこうとしてきても、  
近くに神様いて下さったら、大丈夫やろう。おんなじで、神様神様って  
いつも仰ってたら、どこに行っても神様いらっしやるからな」って。『神  
様神様言わんかったら、どうなるん？』って？それでも神様、守れると  
ころは守って下さるけど、でもやっぱり、近くにいてくれた方がなあ、

神様も守りやすいんやなあ「って言うて、話をしています。

「どこに行っても神様と触れてるんやから、神様は近いっちゃあそうなんやけど、でも、僕の心が大事やねん。僕の心の中で『神様』って言わんと、心が神様に近くなってるやない、守ってあげたくても、なかなか守ってあげれんのやなあ。だから心は大事なんやで」  
という話をね、  
しています。

するとね、まあこういう話であれば、大体の子は皆、「へえ〜」って感心しましてね。帰ってからでも、それで御神米ごしんまいをお下げする。で、御神米の後ろに、最近は、もうお書き下げて神様から「もういい」って言

われたんで、ほとんどするにもないんですけど、以前はよくしておりました、み教えを後ろに書くんですけどね。神に会おうと思えば、にわの口を外へ出て見よ。空が神、下が神であるという、そのみ教えですよ。そのままじゃちょっと分かりにくいんで、神様に会いたければ、お外に出てごらん、っていうことですよね。「空が神 地が神」ということを書いて、それをもう一度お話をして、渡します。

で、「いねを目当てにして、神様どこへ行ってもいて下さるから、どこ向かってでも神様やったらそれでいいんやけど、せやけど、なかなかどこ向いてええか分からんやろ。だから、これをひとつ、拝む目当てにしてね。で、神様って言ったたら、それで家の中ではそれでいいし、いつでも

どいでも、何してても、この御神米様を大事に持って、お外に行くんでも、幼稚園へ行くんでも、学校へ行くんでも、ランドセルの中に入れててごらん。『神様〜』言ったらそれでええから」っていう話をね、よくすると、ほんとに子どもはよく聞いているんですよ。

場合によったらね、『朝起きたら神様も、のど乾くかなあ』という心があつたらなあ、お水でも入れてあげたらいいし、寒い日やったら、ちょっとあつたかい、お湯でも入れてあげて。で、『神様どつぞ』言つて、『召し上がって』言つたら、僕の心が嬉しいから、神様、喜んで召し上がってくれるよ』って言つて。

「それだけやなくて、神様はすいい』お徳』って言つて、神様のすい



いお力をお湯の中、お水の中に入れて下さるからね。寝る時にまた頂いてごらん。元気になるよ」「って言うたら、まあほんとに、素直に子どもはしてくれませよ。

大人になってくるとあきませんなあ。理屈がたってくるか、まあ賢<sup>かしこ</sup>くなり過ぎるんでしょうかなあ。素直にすつと聞けたらいいんですけど、なかなかできない時がありますね。「それほんまかいな」とか「えー」とか。つい考えちゃうんでしょう。「めんどくさい」とかね。

せやけど子どもは「面白いな」と思うんでしょう。「面白いな。へえー、やってみたいな」と思っで。で、やっぱりするんですけどよねえ。すいじもんです、本当にね。

ま、だからこそ、小さい時から神様と仲良う仲良うできるように、心がけてあげるといふのは、親としての大切なお役なんやなあと思いますよね。

神様は遠くにいる、というわけじゃなくて、神様はいつも身近にいて下さる。もっと言えば、神様の体の中で、私たちは生活をさして頂いてる。だからどこに行っても、神様のお恵みなんですね。神様のお恵みの中で、生活をさして頂いている。

人間は、神様のおかげの中に生まれて、おかげの中で生活をして、おかげの中に死んでいくのである。そう、生まれる前も、生まれてからも、

死んでからも、神様のおかげの中なんです。のおかげの中に生まれてくるし、おかげの中で生活するし、おかげの中に、死んでいくんです。安心ですね。どこに行っても神様のおかげなんですからね。そういう神様を頂いているというのんは、ほんとに幸せなことやなあと思います。

拜む目当ても、世界中ではいろんなまあ、神様であったり、時には悪魔だったりね、いろんなものを信仰する人、世の中おられるでしょうけど、まあせやけど、ご慈愛じあいがあって、かわいいと思ってくれて、まあ至らんどご無礼な人間であっても、かわいい、かわいい言うて、おかげを授けて下さり、ご無礼、お粗末、不行き届きがあるに関わらず、心得違っても多いしね。そんな中でも、かわいい、かわいい言うて、愛情注いで

下さるんですから、ほんとにありがたいことです。

また、こうして神様の御用に使うて頂いているという、広前の守としては、その神様の御心を、至らん人間であるものとはいえ、神様のお恵みで助けて頂いた身ですから、その神様の御心を少しでもお参りされる方々に対して、氏子に対して、そのお世話役と言ったら、ある意味世話役ですよ、ちっちゃい子どもや神様にとったら、いくつになっても三つ子ですから、三つ子の子どもやと思つて、「三つ子」って言ったら三歳って考えますが、まあ昔の三つ子っていうのはね、お腹の中で一歳でしよう。だから実際には現代で言ったらまあ、二歳なんですよ。

一歳って言ったたら、子育てしたら、よう聞くとは思いますが、いわゆるイヤイヤ期だね。反抗期であったり、なかなか手がかりますよ。もうちょっと大きいか、もっとちっちゃかったら、素直なもんですけどね。まあ、第一次反抗期なんていうぐらいですから。

せやけど、それがだいたい三つ子なんですよね。ドタバタドタバタって子どももしますけど、そういう時に受け止めてもらって、初めて安心してらるんでしょね。

それがまあ、死ぬまで三つ子やって言われたら、まあそうかもしれんなと思います。でも神様は、それをかわいいと思って、まあ、時にはお叱しかり下さる、かわいいと思ってお叱り下さる。ためを思って、お叱り下さ

る。「まじええわ」って、ほっとかずに。かわいいからと思ってお叱り下  
さる。ためを思ってお叱り下さる。そついう時もありますよね。

そりゃあまあ、神様がそつやって仰って下さるけれども、それをまた、

現していくのは、私という立場っちゃあ、そうですね。金光大神様の

お広前ひろまへを頂いて、勤めさせて頂いている。このお広前の金光大神取次者とりつぎに  
なります。

その神様の御心みこころ、どつまでいっても親らしい心で、母性であつたり、  
時に厳しく接して下さつて、お叱り下さり導いて下さる、そついう父性  
も含めてね、どちらも神様の尊いお働き、ご慈愛じあいやなあと思います。優  
しさの愛情もあれば、厳しさの愛情がある。そついう天地の中で、私た

ちは生活をさして頂いている。

（神様の）おかげの中に生まれ、おかげの中で生活をし、  
おかげの中に死んでいくのである。

【理Ⅱ 利守志野 としもりしの 一より抜粋】

今日もお互いは、おかげの中で生活をさして頂いておりますので、その恵んで頂いたものを頂くしかありません。頂いていいんです。頂かないと立ち行きません。神様は頂いてもらいたいと思っただけです。頂かから、ありがたく頂いて、そして、なるだけ、神様のおかげの中でね、信

心させて頂いてるんですから、おかげの中ですから、しかめっ面で嫌な顔して暮らすのは神様に申し訳ありませんから、嬉しく楽しく有り難く過ぐすということを、教祖様はね、こうお参りをされた方に大事にされてましたけど、なかなかそういう気持ちになれないところが日々の暮らしの中にあたりしますけどね。

でも、そうだから、もうそれでおしまいっていや、信心何もしてないのと一緒ですから、やっぱり信心せんとあきません。信心はお稽古ですから。だから、しっかりと心を神様に向けて、神様のおかげを頂いていく。神様の御心を感じさせて頂く。その中で、嬉しく楽しく有り難く過ぐわしてもらえらるようと、これもお稽古です。



それを、一個一個大切にしてね、それを味わって、頂いてるおかげをよく味わって、どんなに価値のある、どんなに美味おいしいもんでもね、もうただ、口にパツと入れてパツと飲み込むだけじゃ、勿体もったいない時ありませんよねえ。

だからやっぱり、頂いてるおかげは希少価値です。食事が頂けるのもそう、お手洗いや行けるのもそう。特別な何かって言うんじゃないかって、普通に、当たり前前のように頂いてるものこそが、本当に貴重なもんで、かけがえのないものですからね。

失ってから分かるっていうんじゃないかって、まあ、時々病気になったりすることです、ちょっと一旦、失うことがあるかもしれないけれども、

それもまた学びにしてね、神様のお恵みは尊いなあ、日々頂いてる、当たり前で過ごしがちなところがあるがたいんやなあ。ほんまは、有り難いことばかりで、当たり前のことなんて、なあんもないんやなあいうことを、噛み締めながら、噛めば噛むほど、味が出るのが神様のおかげやと思います。

それは、特別な何かじゃなくて、今日はなんにもなかったないう中も、本当は大きなおかげしかないはずなんですよね。それを噛めば噛むほど、味が出ますから。しっかりと味わって、ありがたいなあ、美味しいなあ、勿体ないなあ、嬉しい楽しい有り難いっていう心を、自分の中で見つけながら、育みながら、育てながら、信心のお稽古をさしてもら

いたいなと思います。よくお参りでした。

了



---

# 津田昇平教話 第九話

令和三年一月九日 朝の教話

令和四年一月二十六日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五

---